

報道関係者各位

令和5年10月30日

## 舞鶴引揚記念館 令和5年度 第3回企画絵画展 「引揚援護局～おかえり！の玄関口」の開催について

舞鶴引揚記念館では、令和5年度3回目の企画絵画展「引揚援護局～おかえり！の玄関口」を11月11日(土)から開催します。今年は舞鶴(地方)引揚援護局が閉局して65年になります。国内の引揚港として最長の13年間にわたり66万人の引揚者の帰国手続きとふるさとへの送還をおこなった援護局について、元援護局の職員や引揚者を慰問した少女のエピソードなど関連する資料とともに紹介します。

1. 展示期間 令和5年11月11日(土)～令和6年1月28日(日)  
※展示期間中の休館日：毎週水曜日および12月29日～1月1日
2. 場 所 舞鶴引揚記念館 企画絵画展示室 (企画展は無料。別途入館料が必要です)

### 3. 展示趣旨

舞鶴(地方)引揚援護局では引揚者の帰国手続きだけでなく、ふるさとの戦後復興の様子を伝える展示や市民による演芸会などのイベントも開催されました。不安と希望の入り混じった複雑な感情を抱きながら帰国を果たした引揚者に安堵と希望を与え、戦後のスタートの地として多くの引揚者へエールを送りました。

その援護局が果たした役割を収蔵資料や当時の援護局の様子を知る数少ない証言者のエピソード展示とともに閉局から65年の本年に展示をおこないます。

※舞鶴(地方)引揚援護局の閉局は、昭和33年11月15日

### 4. 展示資料 総点数 25点

- 大金の給付金を運んだ柳行李
- 引揚証明書
- 引揚列車の切符
- 援護金を運んだ元職員 竹中道雄さんのエピソード (パネル展示)
- 援護局で引揚者のために踊りを披露した少女 窪田俊子さんのエピソード (パネル)
- 援護局で配られた駅弁の購入券
- 援護局内の理髪店で使える理髪券 など

### 5. ご取材について

企画展オープン日に、本企画展で紹介しします引揚援護局に慰問に行った体験者の窪田さん、田中さんが引揚記念館に来られることになりました。取材にも対応されます。

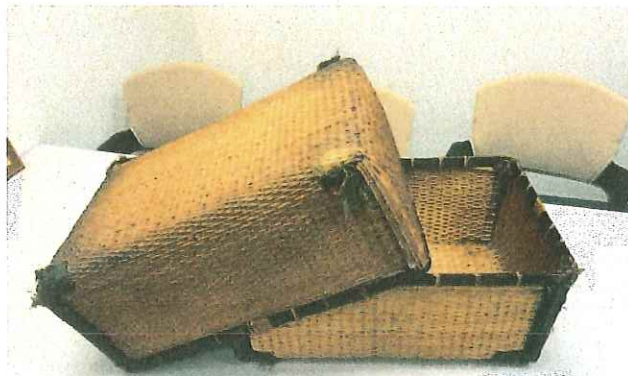
来館日時：令和5年11月11日(土)11時

場 所：舞鶴引揚記念館 企画絵画展示室

訪 問 者：窪田俊子さん(P3に記載)、田中久子さん(P4に記載)



## 6. 主な展示資料



### 『大金の給付金を運んだ柳行李』

●サイズ：高 21cm×幅 55cm×奥 35cm

元援護局職員の竹中道雄さん(93)が給付金を運搬するために使用していたもの。引揚者へ渡す給付金を京都銀行に受け取りに行き、この柳行李に現金を入れて路線バスに乗り援護局へ持ち帰った。警護のための警察官が一人だけ付き添ってくれたが、強盗などに襲われないか毎回心配だった。給付金を援護局の金庫にしまった後も警察官と二人で寝ずの番をした。



令和5年9月16日撮影

竹中道雄 (たけなか みちお) さん

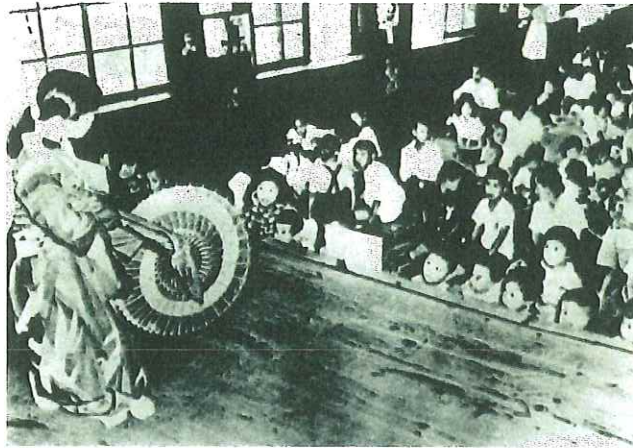
昭和5年(1930)2月1日舞鶴市堂奥生まれ 93歳

昭和27年5月ごろから援護局閉局の昭和33年11月まで務める。主な業務は引揚者の一時金の給付。

現在は自宅にて療養中。







## 『引揚者慰問のため援護局で踊る少女』

引揚者を慰問するために日本舞踊を踊る舞鶴の少女。舞台の上で日本舞踊を踊るのは、当時、小学校2年生だった窪田俊子さん。日本舞踊の教室の先生から「引揚援護局に慰問に行くよ」といわれ、いろんな演目を踊った内の一枚。窪田さんの証言によればこの写真が撮影された時の演目は東海林太郎の「野崎小唄」だった。引揚者は大人ばかりだと思いこんでいたので、こどもがいることに不思議に思ったとのこと。この時に着ていた着物は母のもので、サイズが大きすぎて着心地がわるかったという。

※当該写真は、舞鶴引揚記念館で以前より展示している



令和5年9月10日撮影

窪田俊子（くぼた としこ）さん

昭和16年5月22日 舞鶴市生まれ 82歳

小学校入学後に日本舞踊を近所の人に習い始め、援護局で何度か慰問のために踊りを披露した。

舞鶴引揚記念館（担当：長嶺）

〒625-0133 舞鶴市字平 1584

TEL: 0773-68-0836、FAX: 0773-68-0370

E-mail: hikiage@city.maizuru.lg.jp



SDGs 未来都市



## 『舞鶴（地方）引揚援護局で歌を歌った少女』

3年生か4年生のころに引揚援護局で引揚者のために「さくら さくら」や「みかんの花咲く丘」「ふるさと」などを歌ったという。

舞台の上で大人がギターなどで伴奏する中で歌う中で「ふるさと」を歌うと引き揚げてきた兵隊さん達は涙を流しながら歌っていたという。

歌をうたい終わると、母と祖母と近所の方が用意してくれた「芋飴」やふかした芋をスライスした「芋せんべい」を配り、「芋飴」と「芋せんべい」をもらった兵隊さんたちは、涙を流して喜んでいました。



令和5年10月9日撮影

田中 久子（たなか ひさこ）さん

昭和13年（1938）4月20日 舞鶴市生まれ 85歳

小学校3年生ごろに援護局で引揚者のために歌を披露した。自宅から持参した「芋飴」を配ったこともある。

舞鶴引揚記念館（担当：長嶺）

〒625-0133 舞鶴市字平 1584

TEL:0773-68-0836、FAX:0773-68-0370

E-mail:hikiage@city.maizuru.lg.jp



SDGs 未来都市

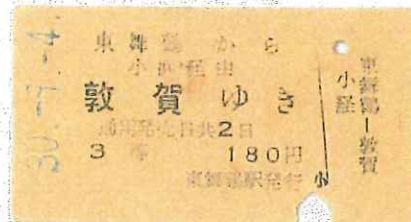




## 『援護局で配られた駅弁の購入券』

●サイズ：縦 7.8cm×横 6.9cm

故郷へ帰還する列車の中で駅弁を購入するための食券。帰還までの道中に食べるものに困らないように、援護局で駅弁と交換できる食券を配布していた。



## 『引揚列車の切符』

●サイズ：縦 3cm×横 5.7cm

引揚者は援護局が日本交通公社（現 JTB）を通じて列車が手配されて、故郷まで帰っていった。その際に最寄り駅までの切符が渡された。

